

オゾンホール報道の真実：まずは下線部から訳してってください

南極のオゾン層に「穴」が開いていることが 1985 年に初めて発見され、20 世紀後半最大の環境問題の一つの始まりが周知の事実となった。地球の南端で起きているオゾンの消失は、季節によって様相が大きく変化することから一層注目を集めた。オゾン量は毎年 8-9 月(南極の春)に急激な減少を示しオゾンホールは通常 9 月後半から 10 月前半までに最深となる。その後オゾンホールは、オゾンに富む周辺大気との混合によって 1 月末までにはほぼ埋め戻され、次の春を迎える。

1980 年代後半から 1990 年代前半にかけて、毎年南極に春が来ると、熱心な科学者は、同じように関心をともにする一般市民にオゾンホールに関する情報を提供した。南極での事象を取り巻くナゾは、だんだんと科学者にも一般市民にも理解されるようになっていった。オゾンホール発生の根本的原因は、種々の産業化学物質であることが確認された。各国政府は当該物質の段階的削減をうたったモントリオール議定書に賛同し、対象となるガスの全世界の生産量は 1990 年代後半までに 90%以上減少した。こうした学術知識や一般的認識の大きな変化に関わった科学者の多くと同じく、筆者はこの問題が社会の関心を集め、学童までが事の本質を理解できたことに勇気づけられた。

モントリオール議定書発効以来、オゾンホールを国際的な環境政策のサグセスストーリーととらえる向きは多い。だがここ数年に筆者は、オゾンホールが出現したという毎年の報道に対して、一般市民が関心を持つというよりも、理解できないという態度を示すことを懸念している。モントリオール議定書は機能しているようにみえるが、オゾンホール縮小の進展速度には大きな揺らぎがある感じがする。そして、オゾンホールは大きさと形が変化しているため、その意味を一般向けに伝えるのは、なおさら困難になっている。

こうした背景から、科学界は新たな課題を突きつけられていると私は感じる。オゾン破壊物質の生産が全世界で現在ほぼ完全に停止されているにもかかわらず、オゾン減少がこの先何年も続くなか、どうすれば科学者はオゾンホールに関する一般市民からの理解を維持できるのだろうか。学生や教師、他分野の科学者のみならず、あらゆる人に対して、わかりやすい言葉でうまく説明するには、どうすればよいのか。なにしろオゾンホールという現象は、科学的であると同時に歴史的であり、技術的であり社会学的でもある。オゾンホールが修復される速度が非常に遅くなるなか、なにがニュースであり、なにがニュースでないのだろうか。オゾンホールの動きとモントリオール議定書の有効性との間には何らかの関係がみられるのか。みられないとすれば、議定書が機能しているかどうかは、どうすればわかるのだろうか。